

団体名	甘日市市	所属	吉和支所地域づくりグループ	他団体等との連携	地域住民
連絡先	(0829) 77-2112				

取組事例名	地域の魅力を結集させた「吉和おさんぽギャラリー」の企画・開催	取組期間	平成24年度～
--------------	--------------------------------	-------------	---------

取組の概要 ～ 地域の魅力を結集させた「吉和おさんぽギャラリー」を企画・開催

“地域の元気のきっかけづくり”を目的として、住民の自宅の一部を開放して手作り作品の展示や体験プログラムなど行う「吉和おさんぽギャラリー」を企画・開催した。

古くから伝わる農機具、山村の風景、人との交流なども含め、地域の魅力をありのまま展示し、来場者に地図を見ながら地域を自由に散策してもらうイベントとした。

取組の背景 ～ 過疎・高齢化による地域力低下、地域支援員配置

吉和地域は、自然、人、文化など様々な魅力がある一方、過疎・高齢化の進行による閉塞感が漂い、農作業の機械化などによって住民同士の交流機会も減少するなど、地域力の低下が懸念されていた。また、観光分野においても地域内との連携が難しく、地域の課題が浮き彫りとなっていた。

こうした状況の中、平成23年8月から、総務省の「地域おこし協力隊・集落支援員」制度を活用した「地域支援員」を吉和地域に配置していた。

取組のねらい ～ 地域の元気のきっかけづくり

イベントを企画・開催する過程で、地域住民がそれぞれの趣味をより一層楽しんだり、人と人とのつながりや交流から新たな地域活動が生まれ、また、地域外へ魅力を発信することが、再訪や定住のきっかけになることを期待した。

取組の具体的内容 ～ 多くの住民や地域内主体が、得意なことを持ち寄って作り上げたイベント

(1) **地域の特性** 吉和地域は、豊かな自然を有し、スポーツ・レクリエーション関係の観光施設が充実している。別荘地としても知られ、市街地からのアクセスも車で約1時間という好条件である。また、集落のほとんどは平坦な盆地にあり、集落間の距離も近いので、地域内での移動も容易な地形である。そこに住む人々は、温和でおもてなし好きな人柄である。冬期の積雪時には、自宅で手仕事をする習慣が残っており、モノづくりが得意な人も多い。このような地域の魅力をそのまま活かすイベントとして、広島市内の団地で開かれているイベントをヒントに、住民の自宅を開放してギャラリーを開催し、1か所だけでなく地域内をまわり、人々と直接触れ合う形のイベントの企画を行った。

(2) **地域の魅力を結集** 地域支援員の呼びかけで集まった、地域在住の30歳前後の女性6名で実行委員会を結成し、自宅を開放できる出展者をチラシで広く呼びかけると同時に、個別に声かけも行った。その際、古くからの農機具や、縁側からの風景など、手作り作品に限らない「地域の魅力」を出展内容として募集した結果、「お寺で写経」、「芋掘り」、「別荘地散歩」などユニークな提案が約30件集まった。出展者説明会や事前ミーティングでイベントの理念や注意点などを共有し、出展者同士の交流や意見交換を行った。

(3) **地域一体でサポート** 共催の吉和市民センターが、実行委員会のミーティング会場や事務スペースを提供し、市職員有志も資金集めに協力した。地域内の企業や店舗は、来場者へサービスを提供する形で協力、美術館は出展者へ展示方法のアドバイスをするなど、地域の様々な主体が、それぞれの方法でイベントをサポートした。

イベント当日は、出展者宅の目印として、赤いTシャツを使用した。

設置方法をそれぞれの出展者に任せたとこ、ボードに貼ったり、人形に着せたり、個性あふれる目印となった。事前に新聞やテレビでも取り上げられ、2日間で約2,000人が訪れた。終了後は、出展者で集まり、当日の様子をスライドで流しながら、意見交換会を行った。



取組を進めていく中での課題・問題点 ～ 企画・運営の担い手と、資金の確保

- (1) イベントの担い手の確保 吉和地域で行われるイベントでは、同じ人物に負担がかかりがちであり、新たなイベントには新たな担い手の確保が必要であった。また、外部人材である地域支援員が、イベントを実現するために、どう参画してもらうかが実行委員会を立ち上げるまでの課題であった。
- (2) 実行委員の時間の確保と主体的な取組 メンバーは仕事、家庭、子育てがある世代のため時間の捻出が課題であった。また、自分たちの行事だということを意識して取り組むことの難しさがあった。
- (3) 次回以降の出展者等の減少 実行委員会を中心とした一部だけの取組や盛り上がりが終わってしまえば、2回目以降の出展者や参加者が減少するのではないかとの懸念があった。
- (4) 安定的な開催に向けた予算面での課題 単発で終わらないイベントとするため、補助金に頼らず、低予算で実現することが課題であった。

創意工夫した点 ～ 一気に参加できる環境づくり・多くの主体の関わり・自主財源の確保

- (1) 地域から信頼のある人物からの紹介 イベントの担い手となる実行委員の確保に当たっては、従来同様のイベントが行われる際に中心となっていた地域の方ではなく、地域の信頼のある人物に、自分の思い描いている構想を相談し、地域支援員（女性）と同世代の女性を紹介してもらい、その方々に参画してもらった。
- (2) 実行委員の職場の巻き込み 当初は夜に実行委員会を行っていたため、子どもを連れてこざるを得ない状況であった。会議に集中できるように日中に時間が取れないかとの意見があり、実行委員が仕事の一貫として活動できるよう、それぞれの勤務先にも共催や後援をお願いし、職場も参画することで、日中に実行委員会を開催することで対応した。これにより、多くの実行委員が参加できる会議の回数を重ねることができ、主体性が生まれていった。
- (3) 出展者の主体的取組と地域住民の参加 出展者は、営利を目的としない等の基本ルールに沿ってそれぞれ独自に展示方法を考えて頂き、また、企業にも自ら効果的なサービスを考案して頂くことで、主体的な取組とした。また、地域住民にも後援やボランティアでの参加をお願いし、様々な主体に様々な形で関わってもらうようコミュニケーションを図った。
- (4) 地域からの出資、市職員有志による活動資金の確保 ポスターやチラシのデザインを自分たちで行うなどの努力により、低予算を実現した。一方、活動資金の確保については、実行委員、出展者、地域内の企業や店舗が各々を出資、また、市内で行われる他の祭りに出店し、地域の特産品販売でイベント資金を得、補助金等に頼らない自主企画・自主運営のイベント開催が実現した。

取組の成果（効果） ～ 来場者・住民の満足度と、開催後の新たな動き

- (1) 地域の魅力の再発見 来場者のアンケートでは、「みなさん親切でおもてなしの心が豊か」、「懐かしい田舎の原風景が見られた」など、地域の魅力が様々な形で伝わったことがみてとれた。また、出展者は、多くの人の来場に生き生きと対応し、吉和地域の住民も、普段は行くことのない別荘地にも足を運び、地域内の交流が深まる機会にもなった。
- (2) 新たな地域づくりの担い手による新しい動き 30歳前後の女性である今回の実行委員は、これまで地域づくりにあまり参画していなかった世代だったが、イベント開催までの様々な活動を通じて、地域に関する活発なアイデアを出すようになり、今年は他の若者も巻き込み、新たに婚活イベントの実施を企画している。また、今回の出展者同士で独自の展示会を開催したり、次回イベントでの配布を目標に、市の保健師と住民によるウォーキングマップ作成が始まったりと、新たな活動につながっている。

今後の展開 ～ 継続・進化を図りながら、住民の思いや動きの「きっかけ」と「受け皿」に

今年度、関係者で他の地域のイベントの視察を実施した。情報の共有や、新たな実行委員・出展者の参加を促し、無理をせず継続し進化させていくことが大切である。

このイベントは、住民や企業の関わり方によって、様々な形に展開する可能性がある。動きの中での「きっかけ」を捉え、これを形にしていく「受け皿」となるようにしていきたい。

他団体へのアドバイス ～ 密なコミュニケーションで理解と参加を促進・効果的な広報

何かを始めるときには、必ず人々の間に不安感や警戒感が生まれるものだが、企画段階から、地域内で目的の共有化を図る機会を設け、会話の中で出てきた住民からの様々な意見や地域への思いをできるだけ反映させていくことが大切である。これが人々の理解を生み、参加への意欲が高まっていく。今回の企画は、地域支援員が普段の住民との交流の中で感じていた思いを受け止めると共に地域の特徴や魅力を活かした取組であった。

また、多くの人に来てもらうことが励みになることで、取組の効果があがる。ポスター、チラシ配布、テレビ、新聞、地域情報誌、ラジオ、ブログなど可能な限りの広報活動も行っている。明確な思いや開催にまつわるストーリー、新しい話題があることが、メディアにとりあげてもらえるカギとなるため、こうしたことを意識し、常に新鮮な思いを持ち、動きを継続していくことが大切である。